

特集「産学連携論文」の編集にあたって

平 田 圭 二^{†1} 鯨 坂 恒 夫^{†2}

産学連携はいまや当然のスキームとしてさかんに試みられているが、産学間には目標や手法のギャップがあるため、それを乗り越えた、あるいはうまく回避した成功例は必ずしも多くない。そのような成功例を共有し、異なるシーズ・リソースを持つ産と学の連携をさらに効果的に進展させたいと願って本特集を編集した。

本誌の特集は研究の領域や対象を特定して編むものがほとんどであるのに対して、本特集は産学連携という研究の実施方法を特定したものである。ターゲットではなくプロセスに焦点をあてているので、ふつうの特集より対応が分かりにくいことは否めない。ターゲットを限定する意図はなく、産だけ学だけでは発見・設定しにくい課題と、その解決に向けた産学の特質のうまい組合せが披露されることを期待していた。

「応用開発」という見出しでまとめた3つの論文はほぼそれにあたる。

他の2つの括り「プロジェクト運営・ワークフロー」「人材育成」は、直接的・間接的に産学連携のプロセスに対する焦点を反映しているといえる。情報処理は他の科学技術に比べ（プロダクトに対する）プロセスの重要度が相対的に高い分野であるので、このようなプロセス指向の研究成果を集めることができたのは、やや望外であったかもしれないが、良い結果を得たのではないかと思う。

投稿件数は26件、そのうち採録決定したのはここに掲載した9論文であるので、採択率は36%であった。先述のとおり対応の分かりにくさがこの数字に現れているかもしれないが、産学連携自体の難しさも含まれているはずである。学術研究は一般性を重視するのに対して、産学連携研究は必然的に個性が強くなる。そのままでは論文にまとめにくい。しかし、トップダウンに演繹的に進められる一般性の高い研究対象がもはや山のように残っていないとすれば、個別事例の研究から少しでも他への適用可能性、一般性を引き出す研究方

法にも今後さらに磨きをかけるべきであろう。

「産学連携論文」特集号編集委員会

- 編集長

平田圭二（NTT）、鯨坂恒夫（和歌山大）

- 編集委員

市瀬龍太郎（NII）、今井 浩（東大）、折原良平（東芝）、児玉祐悦（産総研）、坂井修一（東大）、佐藤三久（筑波大）、柴山悦哉（東工大）、関川 浩（NTT）、高橋 修（はこだて未来大）、武田一哉（名古屋大）、西山 智（KDD）、細部博史（NII）、屋代智之（千葉工大）、吉浦 裕（電通大）、吉野 孝（和歌山大）

^{†1} NTT

^{†2} 和歌山大学